

自閉スペクトラム症と知的発達症のある幼児における 歌や楽器を取り入れた絵本の読み聞かせの試み －絵本の読み聞かせとの比較－

An Attempt to Read Picture Books Incorporating Songs and Musical Instruments to Young Children with Autism Spectrum Disorder and Intellectual Developmental Disorder: Comparison with Picture Book Reading

高濱 麻衣* 井澤 信三**
TAKAHAMA Mai ISAWA Shinzo

本研究は、児童発達支援事業所を利用している自閉スペクトラム症と知的発達症のある幼児4名を対象に、絵本の読み聞かせと歌や楽器を取り入れた絵本の読み聞かせを行った。歌や楽器を取り入れた絵本の読み聞かせによって、絵本に対する反応や読み手との関わりが増えるといった仮説を立て、対象児の行動の違いを比較・分析することを目的とした。二組のペアに対して、条件交代デザインを適用し、「絵本の読み聞かせのみ条件」と「絵本の読み聞かせに歌や楽器を取り入れた条件」を交互に実施した結果、絵本の読み聞かせに歌や楽器を取り入れた条件で、絵本の内容に対する発話や読み手との関わりが増えた対象児がいた一方で、両条件の間に差が見られなかった対象児や絵本の読み聞かせのみ条件で多くの行動が生じた対象児がいた。対象児4名に同様の反応は見られなかったが、歌や楽器を取り入れたことによって生じた行動が見られたことや読み手との関わりが増えた対象児がいたことから、絵本に歌や楽器を取り入れることは、読み聞かせの方法の一つとして有効であると考察された。

キーワード：自閉スペクトラム症, 知的発達症, 幼児, 歌・楽器, 絵本の読み聞かせ

Key words: autistic spectrum disorder, intellectual developmental disorder, young children, songs and musical instruments, reading a picture book

I 問題と目的

1. 絵本と絵本の読み聞かせについて

絵本は、テキスト（ことば・文章）とイラストレーション（図像・絵）で、様々な情報を伝達する視覚表現媒体であり、作り手が様々な情報をテキストとイラストレーションという表現手段で発信し、受け手はその情報を心身で能動的に受け取るものである（生田・石井・藤本, 2013）。

絵本の読み聞かせについて、楊・多治見（2021）は、「読み聞かせは、読み手（保育者）、聞き手（子ども）と絵本の三項関係から構成される。その中の一つでも欠くと、読み聞かせ自体が成立しない。一見すれば保育者は『読み』、子どもが『聞く』という構図になっているように見えるが、実際には、絵本を媒介として、読み手と聞き手の間に生じる様々な相互作用が影響し合いながら、その読み聞かせの行為を完結させているのである」（p.17）と述べている。また、今・尾辻（2020）は、絵本の読み聞かせを通して、読み手と聞き手のみならず、その場を共有した子ども達同士の間関係の深まりが期待できるのではないだろうかと述べている。読み手と聞き手の相互作用だけでなく、聞き手同士の相互作用も

考えられており、絵本の読み聞かせを通して様々な影響し合う場を作ることができると示されている。

2. 絵本と音楽

絵本と音楽の関係性について、竹内・奥（2007）は、絵本の読み聞かせは絵本の音楽表現と捉えることができると述べている。また、古市（2012）は、絵本そのものにリズムがあると述べており、ことばの繰り返しによるリズムがあることや絵本全体がリズムカルに構成されていることなど5点を挙げている。さらに、クラシック音楽を用いた絵本の上演－絵本の音楽会より『スイミー』－では、親子向けのプログラムの中で、絵本の朗読にクラシック音楽を生演奏して上演したという報告がある。子どもも大人も楽器を鳴らしたり、ページをめくったりしているところを注視しており、絵本に生演奏をつけることが物語の世界を間接的に体験するだけでなく、臨場的になり直接体験に近くなると述べている（疇地・嶋田・山本・吉村, 2018）。

このように、絵本の読み聞かせに音楽的な要素が含まれているものや絵本そのものにリズムがあるもの、絵本に楽曲を取り入れて上演した作品も存在している。

* 兵庫県立高等学校キャンパスカウンセラー（公認心理師）

令和6年7月1日受理

** 兵庫教育大学大学院特別支援教育専攻障害科学コース 教授

3. 絵本と自閉スペクトラム症児の先行研究

絵本と自閉スペクトラム症（以下、ASD）児の研究には、山本・近藤（2008）があり、障害児母子通園施設に通う ASD と診断された男児 1 名を対象としている。この研究では、1 年 4 カ月間の実践の中で ASD の男児がどのように絵本に興味を示し、認識・理解していくのか、保育者や他児との関わりの過程を具体的なエピソードで示し、ASD 児に対する絵本を介した効果的な援助方法を導き出している。その中で、「話ことばよりも耳に残りやすい擬態語・擬音語や、せりふをうたうように読むことが効果的である」（p.63）と述べている。

近藤・山本（2013）は、母子通園施設に通う ASD と診断された男児 1 名を対象として、集団での読み聞かせを行い、1 年間の中で共同注意の出現と情動の共有の変化について分析している。その中で、絵本の CD をかけたり、リズムをつけたりして歌いながら絵本を見せると、保育者の口元を注視するようになったという報告や絵本を見せながら歌いかけると、保育者の口元と絵本を交互に見て、体を動かして楽しむ姿が見られたと経過を追っている。また、両角（2006）は、ASD の子どもがピアノの生演奏に合わせてペープサートや人形が動くことに興味をもち、集中して見ていると、ことばが出てきた子どももいると報告している。

このように、絵本と ASD 児の先行研究は多くあるわけではないが、ASD 児に対する絵本の読み聞かせの方法や共同注意、情動の共有、ことばの発達に絵本と音楽が深く関わっていると言える。

4. 本研究の目的

ASD 児に対する絵本の読み聞かせを続けていくことは、絵本への興味、集団での意図と情動の共有・共感を促す（近藤・山本, 2013）とされており、絵本の読み聞かせそのものが ASD 児への関わりの一つとして有効であることが示されている。さらに、絵本の読み聞かせに音楽を用いた実践がすでに存在しており、ASD 児の発達に寄与していることが示唆されている。先行研究から具体的なエピソードとして、ASD 児の行動が良好に変化する実践は報告されているが、その変化の定量的分析がなされている先行研究は管見の限り見当たらない。

本研究では、ASD 児を対象として、絵本の読み聞かせのみと歌や楽器を取り入れた絵本の読み聞かせを行うこととする。歌や楽器を取り入れた絵本の読み聞かせによって、ASD 児の絵本に対する反応や読み手との関わりが増えるといった仮説を立て、絵本の読み聞かせのみのときとの行動の違いを比較・分析することを目的とする。

II 方法

1. 対象児

対象児は X 市にある児童発達支援事業所を利用して A 児、B 児、C 児の男児 3 名と D 児の女児 1 名であった。4 名は週に 1 回、児童発達支援事業所に通所していた。

(1) A 児

A 児の研究開始時の年齢は、6 歳 6 カ月であった。ASD と診断されており、5 歳 10 ヶ月のときに受けた新版 K 式発達検査 2001 の結果は、姿勢・運動が 3 歳 1 ヶ月、認知・適応が 2 歳 1 ヶ月、言語・社会が 2 歳 2 ヶ月、全領域が 2 歳 2 ヶ月であった。療育手帳を取得しており、区分は B2 であった。A 児は 3 歳 8 ヶ月から児童発達支援事業所に通所しており、保育所にも通っていた。

(2) B 児

B 児の研究開始時の年齢は、6 歳 5 ヶ月であった。ASD と中等度知的発達症と診断されており、5 歳 9 ヶ月のときに受けた新版 K 式発達検査 2001 の結果は、認知・適応が 2 歳 3 ヶ月、言語・社会が 2 歳 0 ヶ月、全領域が 2 歳 3 ヶ月であった。療育手帳を取得しており、区分は B2 であった。B 児は 3 歳 7 ヶ月から児童発達支援事業所に通所しており、こども園にも通っていた。

(3) C 児

C 児の研究開始時の年齢は、6 歳 2 カ月であった。ASD と中等度知的発達症と診断されており、5 歳 7 ヶ月のときに受けた新版 K 式発達検査 2001 の結果は、姿勢・運動が 3 歳 9 ヶ月、認知・適応が 2 歳 6 ヶ月、言語・社会が 2 歳 0 ヶ月、全領域が 2 歳 4 ヶ月であった。療育手帳を取得しており、区分は B1 であった。C 児は 2 歳 11 ヶ月から児童発達支援事業所に通所しており、こども園にも通っていた。

(4) D 児

D 児の研究開始時の年齢は、5 歳 0 ヶ月であった。ASD と診断されており、4 歳 11 ヶ月のときに受けた新版 K 式発達検査 2001 の結果は、姿勢・運動が 3 歳 9 ヶ月、認知・適応が 3 歳 4 ヶ月、言語・社会が 2 歳 1 ヶ月、全領域が 2 歳 9 ヶ月であった。療育手帳は取得していなかった。D 児は 3 歳 9 ヶ月から児童発達支援事業所に通所しており、こども園にも通っていた。

2. 研究期間と実施場面

二人組で実施したため、A 児と B 児をペア 1 とし、C 児と D 児をペア 2 とした。ペア 1 は、20XX 年 2 月～3 月であった。ペア 2 は、20XX 年 6 月～9 月であった。ペア 1 とペア 2 の療育プログラムは、粗大運動遊び、始まりの会、机上学習と製作は交互に行い、その後、おもちゃ遊び、終わりの会で構成されており、療育時間は 1 時間 10 分であった。療育プログラムの一部である始まりの会は手遊び、名前呼び、絵本の読み聞かせ、体操で構成されており、本研究は始まりの会の絵本の読み聞かせの時間に行った。

3. アセスメント

研究開始前に対象児 4 名の療育中の様子を観察した。また、児童発達支援事業所の保育士に対象児が興味をもちやすい絵本について聞き取りを行った。

(1) A 児の療育中の様子と興味をもちやすい絵本

B 児と一緒に遊ぶことはなく、保育士と一緒に遊んでいたが、時折 B 児を見ることはあった。出してほしいものがあると、保育士の手を引いて誘導し、保育士が「出

して」と声をかけると、A児は音声模倣をしていた。始まりの会の手遊びでは、A児が好む手遊びでないとき大きな声を出すことがあった。その他の場面でも、意に沿わないことがあると、大声を出して立ち歩くこともあった。絵本の読み聞かせでは、繰り返しの構成でページ数が少ない絵本は比較的聞いていることが多かった。絵本の絵がはっきりしており、原色の絵を好む傾向があった。乗り物に興味をもっており、車が好きであった。

(2) B児の療育中の様子と興味をもちやすい絵本

A児と遊ぶことはなかったが、A児が活動的に遊んでいるとA児の方を見ることはあった。決まったもので遊ぶ様子は見られず、B児がそのときに遊びたいもので遊んでいることが多かった。始まりの会は、開始から終了まで着席していた。絵本の内容を問わず着席して注目しており、保育士が読むと単語を音声模倣することもあった。電車や新幹線の絵本を好んでおり、おもちゃ遊びの時間に見ていることもあった。

(3) C児の療育中の様子と興味をもちやすい絵本

C児から使いたいものを単語で要求するが、C児から積極的に遊ぶ様子は見られなかった。保育士が声をかけると、保育士が作ったもので遊ぶことはあった。始まりの会では着席することが難しく、C児のそばに保育士がついている状態であった。動物の絵本を好んでいるが、保育士が動物の絵本の読み聞かせをしても離席することが多かった。

(4) D児の療育中の様子と興味をもちやすい絵本

C児と遊ぶことはなかったが、D児から保育士への働きかけは多かった。ことばは不明瞭であるが、保育士の方を見ながら声を出したり、指さしをしたりして取ってほしいものを要求する姿が見られた。事前に遊びの終了を知らせていても片づけをすることが難しく、泣いて拒否をすることがあり、その後の活動に影響するほど切り替えが難しいときもあった。絵本の読み聞かせでは保育士のところへ行き、次々とページをめくっていることが多かった。特別好んでいるキャラクターや絵本はなかったが、おもちゃ遊びの時間に絵本をめくって見ていることはあった。

4. デザイン及び手続き

条件交代デザインを適用し、「絵本の読み聞かせのみ条件（以下、絵本のみ条件）」と「絵本の読み聞かせに歌や楽器を取り入れた条件（以下、絵本+音楽条件）」とした。ペア1、ペア2ともに各条件を交互に4回ずつ、計8回実施した。ペア1は1週目に絵本のみ条件、2週目に絵本+音楽条件、3週目に絵本のみ条件と交互になるように設定し、ペア2は1週目に絵本+音楽条件、2週目に絵本のみ条件、3週目に絵本+音楽条件と交互になるように設定した。対象児に対して、着席して絵本の読み聞かせを聞くようには伝えておらず、離席やロッカーに入るなどの行動があっても対象児の行動を制止することはしなかった。研究実施者だけでなく、児童発達支援事業所の職員も同様の対応をした。また、対象児に対する読み手の対応方法は、篠沢（2013）を参考にし、

対象児の発話に対して同じことばを繰り返したり、対象児の意図を汲んだものをことばにして返したりする対応をした。

(1) 絵本の選定

中島・工藤（2021）が述べている絵本の選び方を参考に絵本を選定した結果、本研究では、ふくながじゅんぺい作の『へんしん！いろいろれっしゃ』を使用することとした。この絵本は対象児の発達年齢に合ったものであり、ペア1の対象児の好みを反映しているものであった。ペア2の対象児については、好きな絵本であっても離席していたことや特別好きな絵本がないこと、同じ絵本を使用した方が対象児の行動変化を測定しやすいことからペア2もペア1と同じ絵本を使用した。加えて、絵本に歌や楽器を取り入れるという視点から考えたときに、繰り返し出てくる文に旋律をつけられることや効果音を取り入れた構成にしやすいくとも、この絵本を選定する理由であった。

(2) 絵本のみ条件

絵本のみ条件では、研究実施者が対象児に絵本の読み聞かせを行った。読み聞かせの方法は、生田ら（2013）が述べているように、落ち着いて全体を見回してから読み始め、めくるときは子どもの反応を見ながら行い、めくって一呼吸置いてから文を読んだ。読む速度や抑揚をつけて読むところなどを会得してから読み聞かせを行った。

(3) 絵本+音楽条件

絵本+音楽条件では、繰り返し出てくる文以外は絵本のみ条件と同様の方法で読み、歌唱や楽器の演奏も研究実施者自身で行った。歌や楽器の取り入れ方については、小島（2010）が絵本には音楽をつくる着想の源があり、「ことば」「絵」「展開」など6点に分類できると述べている。また、音楽的アイディアに関しては、「ことばを歌やメロディーにする」「短いフレーズの音楽をつくる」「効果音」など7点が明らかになったと述べている。これらを参考に研究実施者が作曲をして、歌や楽器を取り入れた構成にした。繰り返される文には旋律をつけ、カリンパで伴奏をしながら歌ったり、Fig. 1で示したように列車が虹の橋を渡る場面では、作曲した曲を鍵盤ハーモニカで演奏したりした。さらに、作曲したオープニング曲とエンディング曲を取り入れることによって、絵本+音楽条件であることを明確にした。



Fig. 1 虹の橋を渡る曲

(4) 場面設定

絵本のみ条件の場面設定を Fig. 2-1 に、絵本+音楽条件の場面設定を Fig. 2-2 に示した。対象児の斜め前方と後方にビデオカメラを1台ずつ設置して、対象児の様子を定位置から撮影した。絵本のみ条件では、読み手が右手で絵本を持って、読み聞かせを行った。絵本+音楽条

件では、読み手が絵本を読んでいる合間に楽器で効果音を入れることや伴奏しながら歌うこともあったため、絵本は譜面台に立てて読み手の前に設置した。

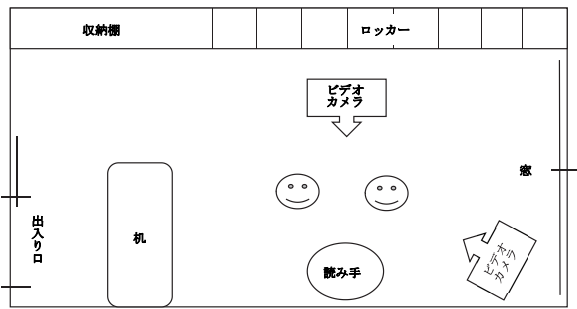


Fig. 2-1 絵本のみ条件

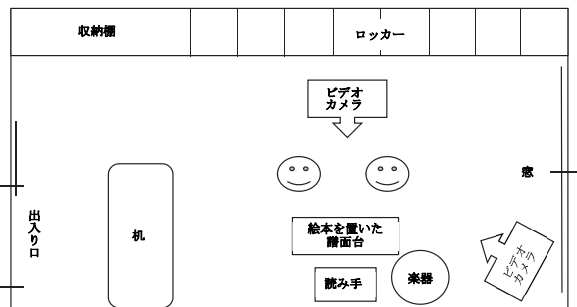


Fig. 2-2 絵本+音楽条件

5. 分析・評価方法

(1) 対象児の行動分析

富田・佐々木・青悦 (1995) の分析方法を参考に「ことば」「動作・行為」「表情」の三つのカテゴリーに絵本+音楽条件の分析観点を含めた計 20 項目に分類し、作成したものを Table 1 に示した。撮影した動画を再生しながら、研究実施者がトランスクリプトを作成した。作成したトランスクリプトを基に生起頻度や持続時間を計数、計測し、絵本のみ条件と絵本+音楽条件のときの対象児の行動分析を行った。

やりとりの総数は、深田・倉盛・小坂・石井・横山 (1999) を参考に、対象児もしくは読み手の発話に関連した発話が継続することによって形成されるブロックを発話ブロックとして、1ブロックをやりとり 1 回と定義した。対象児もしくは読み手の発話に返された場合を 1 ターン、この発話を受けてさらに返したときには、発話が返される度にターン数が一つ増えると定義した。「ことば」のカテゴリーではあるが、非言語的な反応が行われたときも発話ブロックが継続している場合は、ターン数として計数した。やりとりの読み手から対象児は、読み手から対象児に声をかけた他に、読み手が絵本の文を読み、それがやりとりのきっかけになったものも含めた。歌うの 3 項目は、一部分であっても対象児が歌ったこととした。

読み聞かせのときにいた場所について、対象児の席は対象児が着席している状態の他に、対象児の椅子に身体

Table 1 対象児の行動分析カテゴリー

カテゴリー	項目	測度
ことば	1. 絵本の内容に対する発話	頻度
	2. やりとり	
	(1) 対象児から読み手	頻度
	(2) 読み手から対象児	頻度
	3. 歌う	
	(1) 対象児が先に歌う	頻度
	(2) 同時に歌う	頻度
	(3) 対象児が後から歌う	頻度
	動作・行為	1. 指さし
(1) 絵本		頻度
(2) 読み手		頻度
2. 友だちを見る		頻度
3. ストーリーや絵を身体で表現する		頻度
4. 絵本や音がした方に身を乗り出す		頻度
5. リズムに乗る・リズムをとる		頻度
6. 楽器を触る・鳴らす		頻度
表情	7. 絵本や読み手を見る	持続時間
	8. 読み聞かせのときにいた場所	
	(1) 対象児の席	持続時間
	(2) 読み手のところ	持続時間
	(3) その他	持続時間
	1. 微笑む	頻度
2. 悲しげな表情	頻度	
3. 驚いた表情	頻度	

の部位が触れている状態や椅子の周りにも含めた。読み手のところは、対象児と読み手の中間地点よりも読み手側にいる場合とした。その他の場所については、対象児の席よりも後ろの場所など絵本の読み聞かせをしているところから離れたところとした。絵本のみ条件と絵本+音楽条件は、それぞれ要した時間が異なることから、各場所にいた時間については計測した時間を全て 300 秒あたりの時間に換算し、各条件ごとに 4 回の平均持続時間を算出した。絵本や読み手を見ていた時間についても同様に算出した。なお、各項目の頻度については、各条件ごとに 4 回の合計回数を算出した。

また、研究実施者が作成したトランスクリプトの中から各ペアの絵本のみ条件を 1 回ずつ、絵本+音楽条件を 1 回ずつ抽出し、本研究に関与していない大学院生 1 名に依頼し、作成したトランスクリプトから対象児の行動分析カテゴリーに基づき、分類を行った。対象は頻度のみとして行った結果、ペア 1 は 95.8%、ペア 2 は 91.5% の一致率を得た。

(2) 担当保育士による事後評価

研究終了後に各ペアの始まりの会を担当する保育士に金子・北野 (2010) や疇地・嶋田・山本・吉村 (2021) を参考に作成したアンケートを配布し、回答を得た。内容は、保育士の属性、保育士自身が読み聞かせをするときの絵本の選定理由、絵本に歌や楽器を取り入れた読み聞かせをどのように感じたかなどを問うものであり、Table 2 に示した。質問 1 と質問 2 は、最も該当するものにチェックを記入することとした。質問 3 は「良い」

から「悪い」の4件法、質問4は「合っていた」から「合っていないかった」の4件法、質問5は「思う」から「思わない」の4件法で回答を求め、最も該当するものにチェックを記入することとした。そして、回答の理由を記述式とした。質問6は記述式とした。

Table 2 担当保育士による事後アンケート

質問
1. 保育士の属性
(1) 性別
(2) 年齢
(3) 保育士経験の年数
(4) 児童発達支援事業所の勤務年数
2. 保育士自身が読み聞かせをするときの絵本の選定理由は何ですか。
3. 絵本に歌や楽器を取り入れた読み聞かせをどのように感じましたか。
4. 音楽（歌や効果音など）は、絵本に合っていましたか。
5. 絵本に歌や楽器を取り入れた読み聞かせを実践してみたいと思いましたか。
6. 対象児の様子で気づいたことをお答えください。

6. 倫理的配慮

児童発達支援事業所の管理者兼児童発達支援管理責任者に研究依頼を行い、書面及び口頭により説明し、同意を得た。対象児の保護者には、研究の目的と個人情報保護について伝え、研究目的以外では個人情報を使用しないことを書面及び口頭により説明し、同意を得た。

III 結果

1. ペア1

(1) A 児の絵本のみ条件と絵本+音楽条件の結果

行動分析カテゴリーに基づき「ことば」「動作・行為」「表情」の三つのカテゴリー、計20項目に分類した結果をTable 3に示した。

絵本のみ条件では、読み聞かせのときにいた場所において、A 児は自分の席にいた時間が最も長く、絵本や読み手を見ていた時間も長いという結果になった。また、A 児は絵に対する指さしと列車が走っている場面では、指で線を描くような動きをしており、ストーリーや絵を身体で表現するという行動も絵本のみ条件で多く生じた。読み手からA 児に対するやりとりも、絵本のみ条件で多く生じた。

一方、絵本+音楽条件では、絵本のみ条件よりも絵本の内容に対する発話が増えた。また、楽器があることによって、読み手に楽器を鳴らしてほしいときや絵本の場面に応じた楽器をA 児が読み手に手渡す行動が生起し、やりとりが発展することでA 児から読み手へのやりとりが絵本のみ条件よりも多く生じた。軽く身体を揺らしたり、歌いながらリズムに乗って笑顔で飛び跳ねたりするなど、リズムに乗ったり、リズムをとったりする行動も生じた。さらにA 児が読み手より先に歌う行動や読み手が歌った後にA 児が歌う行動も生じた。

なお、A 児の絵本や音がした方に身を乗り出す項目において、A 児は身を乗り出すと読み手の方に行き、A 児の席に戻ることがほぼなかったことから、分析の対象から除外した。

Table 3 A 児の両条件の結果

項目	絵本のみ条件	絵本+音楽条件
絵本の内容に対する発話	127	139
やりとり（対象児から読み手）	38	48
やりとり（読み手から対象児）	4	1
歌う（対象児が先に歌う）	0	2
歌う（同時に歌う）	0	0
歌う（対象児が後から歌う）	0	3
指さし（絵本）	6	0
指さし（読み手）	0	0
友だちを見る	1	0
ストーリーや絵を身体で表現する	6	2
絵本や音がした方に身を乗り出す	分析の対象から除外	分析の対象から除外
リズムに乗る・リズムをとる	0	5
楽器を触る・鳴らす	使用していない	23
絵本や読み手を見る	246.8	169.1
読み聞かせのときにいた場所（対象児の席）	175.0	52.5
読み聞かせのときにいた場所（読み手のところ）	80.2	128.6
読み聞かせのときにいた場所（その他）	44.8	118.9
微笑む	7	9
悲しげな表情	0	0
驚いた表情	0	0

注) グレーに網かけた絵本や読み手を見る、読み聞かせのときにいた場所(3項目)は持続時間で、300秒(単位時間)あたりの秒数。その他は合計回数。

(2) B 児の絵本のみ条件と絵本+音楽条件の結果

行動分析カテゴリーに基づき「ことば」「動作・行為」「表情」の三つのカテゴリー、計20項目に分類した結果をTable 4に示した。

絵本のみ条件では、読み聞かせのときにいた場所において、B 児も自分の席にいた時間が最も長く、絵本や読み手を見ていた時間も絵本+音楽条件よりやや長いという結果になった。読み手からB 児のやりとりは、絵本のみ条件で1回生じた。

一方、絵本+音楽条件ではB 児の声は出ていないが、文に旋律をつけたところを読み手と同時に口を動かし、まるで歌っているかのようなようであった。さらに、読み手が作曲して鍵盤ハーモニカで演奏した旋律も歌っているかのように口を動かしていた。また、読み手が歌っているときに指でリズムをとる行動が生起し、読み手が楽器の音を出すとB 児は身を乗り出し、音がする方を見ていた。友だちを見る行動は絵本のみ条件よりも5回多く生起し、A 児が楽器の音を出したときにA 児を見ていた。その他の項目においては、両条件の間に大きな差は見られなかった。

Table 4 B 児の両条件の結果

項目	絵本のみ条件	絵本+音楽条件
絵本の内容に対する発話	3	3
やりとり (対象児から読み手)	1	1
やりとり (読み手から対象児)	1	0
歌う (対象児が先に歌う)	0	0
歌う (同時に歌う)	0	7
歌う (対象児が後から歌う)	0	0
指さし (絵本)	0	0
指さし (読み手)	0	0
友だちを見る	2	7
ストーリーや絵を身体で表現する	0	0
絵本や音がした方に身を乗り出す	0	3
リズムに乗る・リズムをとる	0	3
楽器を触る・鳴らす	使用していない	0
絵本や読み手を見る	244.5	227.6
読み聞かせのときにいた場所 (対象児の席)	300.0	258.9
読み聞かせのときにいた場所 (読み手のところ)	0.0	0.0
読み聞かせのときにいた場所 (その他)	0.0	41.1
微笑む	2	3
悲しげな表情	0	0
驚いた表情	0	0

注) グレーに網かけた絵本や読み手を見る、読み聞かせのときにいた場所(3項目)は持続時間で、300秒(単位時間)あたりの秒数。その他は合計回数。

(3) 担当保育士による事後アンケートの回答結果

ペア1の始まりの会を担当していた保育士の回答結果は、60代の女性保育士で、保育士経験は21年～25年であり、児童発達支援事業所の勤務年数は3～5年であった。保育士自身が読み聞かせをするときの絵本の選理由は、子どもの興味関心であった。絵本に歌や楽器を取り入れた読み聞かせは「良い」と回答しており、その理由は歌や楽器がもつ効果で気持ちが安定し、より絵本に集中することができるということであった。音楽(歌や効果音など)は絵本に合っていたかについては「合っていた」と回答しており、その理由として情景に合わせて効果音が入り、絵本へ関心を向けることができていたということであった。絵本に歌や楽器を取り入れた読み聞かせを実践してみたいと思ったかについては「やや思う」と回答し、その理由は自分が楽しみながら取り組めたらと思うということであった。対象児の様子で気づいたことについては、絵本が始まると集中して見ていることや楽器にも興味をもって触っていたが、音を楽しむところから絵本へも注目し、関心を向けることができていたように思うと回答していた。

2. ペア2

(1) C 児の絵本のみ条件と絵本+音楽条件の結果

行動分析カテゴリーに基づき「ことば」「動作・行為」「表情」の三つのカテゴリー、計20項目に分類した結果をTable5に示した。

絵本のみ条件では、絵本や読み手を見ていた時間は長かったが、読み聞かせのときにいた場所において、その他のところにいた時間が最も長かった。C児は絵本のみ条件でも歌う行動が生起し、絵本+音楽条件のときに読み手が歌うことになっていたところよりも先に歌っていた。その他の項目においては生起しなかった項目もあり、生起しても絵本+音楽条件よりも低頻度であった。

一方、絵本+音楽条件では、友だちを見るという行動が非常に多く生起していた。楽器を吹きながらD児を見たり、D児に楽器を手渡したりすることもあった。また、絵本の内容に対する発話は、絵本のみ条件よりも2回多く生起した。やりとりのC児から読み手、読み手からC児については、楽器を介したやりとりが多く、C児が楽器を鳴らしたいときや読み手に楽器を鳴らしてほしいとき、C児が持っている楽器を読み手が使いたいときに生起していた。そのため、楽器を触ったり鳴らし

Table 5 C 児の両条件の結果

項目	絵本のみ条件	絵本+音楽条件
絵本の内容に対する発話	3	5
やりとり (対象児から読み手)	4	6
やりとり (読み手から対象児)	1	11
歌う (対象児が先に歌う)	1	0
歌う (同時に歌う)	0	0
歌う (対象児が後から歌う)	0	1
指さし (絵本)	0	0
指さし (読み手)	0	0
友だちを見る	3	25
ストーリーや絵を身体で表現する	0	0
絵本や音がした方に身を乗り出す	1	5
リズムに乗る・リズムをとる	0	0
楽器を触る・鳴らす	使用していない	55
絵本や読み手を見る	184.6	70.6
読み聞かせのときにいた場所 (対象児の席)	47.0	0.0
読み聞かせのときにいた場所 (読み手のところ)	74.1	295.9
読み聞かせのときにいた場所 (その他)	178.9	4.1
微笑む	0	1
悲しげな表情	0	0
驚いた表情	0	0

注) グレーに網かけた絵本や読み手を見る、読み聞かせのときにいた場所(3項目)は持続時間で、300秒(単位時間)あたりの秒数。その他は合計回数。

たりする頻度も高く、読み聞かせのときにいた場所においても、C児は読み手のところにいた時間が最も長かった。

(2) D児の絵本のみ条件と絵本+音楽条件の結果

行動分析カテゴリーに基づき「ことば」「動作・行為」「表情」の三つのカテゴリー、計20項目に分類した結果をTable 6に示した。

絵本のみ条件では、絵本や読み手を見ていた時間は長く、読み聞かせのときにいた場所においては、読み手のところにいた時間が最も長かった。絵本の内容に対する発話が非常に多く生起し、絵本の絵を指さししながら絵の名称を発話していた。そのD児の発話に対して読み手が応答したことから、D児から読み手のやりとりが多く生起した。読み手が読んでることばに対してD児が応答していたことから、読み手からD児のやりとりも多く生起した。絵が変化したところや列車の色名を質問しながら指さしをしたり、絵本のストーリーや絵に合った動きを身体で表現したりする行動も絵本のみ条件のみで生起していた。「表情」のカテゴリーにおいても、読み手のことばを音声模倣して微笑むことや列車の色が変化したときに驚いた表情を見せるなど、表情の変

化も多く見られた。

一方、絵本+音楽条件では、友だちを見るという行動が非常に多く生起した。C児が楽器の音を出したときやC児がD児に楽器を手渡したときに見ていた。D児から楽器を触りに行くことはなかったが、C児が手渡す楽器を受け取ることによって、楽器を触る行動も生起した。読み聞かせのときにいた場所においては、その他のところにいた時間が最も長く、読み手のところにはいなかったことが示された。

(3) 担当保育士による事後アンケートの回答結果

ペア2の始まりの会を担当していた保育士の回答結果は、30代の女性保育士で、保育士経験は6年～10年であり、児童発達支援事業所の勤務年数も同様であった。保育士自身が読み聞かせをするときの絵本の選定理由は、子どもの興味関心であった。絵本に歌や楽器を取り入れた読み聞かせは「良い」と回答しており、いつも絵本を読むだけだったので、そこに音や歌が入ることによって感じられる迫力や新鮮さがあり、とても良かったということであった。音楽（歌や効果音など）は絵本に合っていたかについては「合っていた」と回答しており、その理由として、汽笛や雨粒などの音が絵本にとっても合っていたということであった。絵本に歌や楽器を取り入れた読み聞かせを実践してみたいと思ったかについては「やや思う」と回答し、その理由は、ぜひ実践してみたいと思うが、頻繁には難しいと感じた。歌つきの絵本は図書館で借りられるため実践してみたいということであった。対象児の様子で気づいたことについては、楽器を探す姿や楽器を嬉しそうに触る姿、ペアの対象児に楽器を手渡す姿が見られ、子ども達にとって素敵な体験ができたと思うと回答していた。

Table 6 D児の両条件の結果

項目	絵本のみ条件	絵本+音楽条件
絵本の内容に対する発話	31	0
やりとり (対象児から読み手)	12	1
やりとり (読み手から対象児)	9	1
歌う (対象児が先に歌う)	0	0
歌う (同時に歌う)	0	0
歌う (対象児が後から歌う)	0	0
指さし (絵本)	14	0
指さし (読み手)	0	0
友だちを見る	1	13
ストーリーや絵を身体で表現する	4	0
絵本や音がした方に身を乗り出す	0	0
リズムに乗る・リズムをとる	0	0
楽器を触る・鳴らす	使用していない	3
絵本や読み手を見る	257.4	104.4
読み聞かせのときにいた場所 (対象児の席)	60.2	118.2
読み聞かせのときにいた場所 (読み手のところ)	209.8	0.0
読み聞かせのときにいた場所 (その他)	30.1	181.8
微笑む	4	1
悲しげな表情	0	0
驚いた表情	2	0

注) グレーに網かけた絵本や読み手を見る、読み聞かせのときにいた場所(3項目)は持続時間で、300秒(単位時間)あたりの秒数。その他は合計回数。

IV 考察

本研究では、歌や楽器を取り入れた絵本の読み聞かせによって、ASD児の絵本に対する反応や読み手との関わりが増えるといった仮説を立てて行った。

始めに、対象児4名の行動分析の結果を基に仮説の検証について述べる。次に「ことば」「動作・行為」「表情」の三つのカテゴリーの中の項目から、絵本のみ条件と絵本+音楽条件の中で生起頻度が高かった項目を考察する。さらに、本研究の結果や各ペアの担当保育士の事後アンケートの回答結果によって導き出されたことから、歌や楽器を取り入れた絵本の読み聞かせをする際に考慮することを考察する。

1. 仮説の検証について

本研究では、歌や楽器を取り入れた絵本の読み聞かせによって、ASD児の絵本に対する反応や読み手との関わりが増えるといった仮説を立てていたが、対象児の行動分析カテゴリーに照らし合わせると、A児とC児では、絵本のみ条件よりも絵本+音楽条件の方が、絵本の内容に対する発話やA児やC児から読み手への関わりが増えた。B児は、絵本の内容に対する発話やB児から読み手への関わりにおいて、両条件の間に差は見られな

かった。

一方、D児は絵本のみ条件で多くの行動が生じた。絵本の内容に対する発話は絵本のみ条件のみで生じ、D児から読み手、読み手からD児へのやりとりも絵本のみ条件で多く生じた。

このように対象児4名に同様の反応は見られなかったが、歌や楽器を取り入れたことによって生じた行動があったことや読み手との関わりが増えた対象児がいた。また、仮説には示していなかったが、絵本+音楽条件においてA児を除いたB児、C児、D児は友だちを見るという行動が非常に多く生じた。これらの結果から、ASD児に対して歌や楽器を取り入れた絵本の読み聞かせをすることは、読み聞かせの方法の一つとして有効であると考えられる。

2. 絵本のみ条件の考察

(1) 安定した環境の重要性

対象児4名に共通していたことは、絵本のみ条件で絵本や読み手を見ていた時間が長く生じていたことであった。これは、絵本のみ条件が普通の療育と同様の安心できる環境であり、安定して絵本に集中できる環境の重要性(並木, 2012)が示唆される。また、富田ら(1995)は、絵本の読み聞かせのときの子ども達の反応は「動作・行為」の中で保育者を見るという項目の反応が非常に多いと述べている。本研究では、絵本や読み手を見るという項目を設定したところ、ASD児であっても絵本の読み聞かせのときに絵本や読み手を見ていた時間が長くと示された。一方で、読み聞かせのときにいた場所においては、A児とB児は自分の席、C児はその他のところ、D児は読み手のところにいた時間が長く、必ずしも着席していたということではなかった。

読み手から対象児へのやりとりの頻度は全体的に低かったが、C児を除いたA児、B児、D児で絵本のみ条件で多く生じた。読み手が読む絵本のことばに対して応答したことから、楽器を用いていない絵本のみ条件の方が読み手のことばに集中できる環境であったと考えられる。また、D児が保育士に積極的に働きかける姿は、普通の療育中の様子と重なる部分であった。

(2) 指さしや身振りによる表現

A児とD児は絵本に対する指さしとストーリーや絵を身体で表現するという行動が生じた。ここでも、富田ら(1995)が述べているように「ことば」による発話がありながらも、同時に「動作・行為」で表現しているという考察と一致する。平澤(2019)の絵本場面の指さしや身振りの機能分類から、A児の指さしとストーリーや絵を身体で表現する行動は、絵本の絵を説明する機能であったが、D児の指さしは絵の説明だけでなく、列車の色の変化を発見したことを読み手に伝えるという機能や列車の色名を読み手に質問する機能であった。そして、D児のストーリーや絵を身体で表現する行動においては、絵本の場面や列車の表情のような絵本の絵のみならず、読み手のことばの抑揚から、その場面に合った表現をしていた。これらの行動は同じ絵本を繰り返

読み聞かせすることによって生じたことから、対象児が絵本の内容を記憶し、自然に絵本の世界と同じような動作や発話が引き出されてくる(大元, 2023)ことによるものであると示唆される。

(3) 発達年齢や個人要因の影響

D児は絵本のみ条件において「ことば」「動作・行為」「表情」の三つのカテゴリーの項目で、多くの行動が生じた。これは、D児の研究開始時の年齢が対象児4名の中で最も低く5歳0ヶ月であったが、新版K式発達検査2001の結果の認知・適応が3歳4ヶ月と最も高かったことが影響していると考えられる。疇地ら(2018)は、絵本の読み聞かせにクラシック音楽を合わせることでストーリーの理解を助けると述べており、本研究でも絵本の読み聞かせに歌や楽器を取り入れた。しかし、D児においては、視覚的に示されている絵本の絵の変化や読み手のことばで絵本の内容を把握することが可能であったと推測される。また、D児は普段から保育士に対してことばでの働きかけが多く、関わりを求めることが多かったことも今回の結果に影響したと考える。

3. 絵本+音楽条件の考察

(1) 対象児から読み手への楽器を介したやりとり

絵本+音楽条件では、読み手のそばに楽器があった。A児は読み手に楽器を鳴らしてほしいときや絵本の場面に応じた楽器をA児が読み手に手渡すときにことばを発話し、それに読み手が応答したことから、絵本のみ条件よりもA児から読み手へのやりとりが増えたと考えられる。

C児も絵本の内容に対する発話やC児から読み手へのやりとりが、絵本のみ条件よりもやや多く生じていた。A児と同様にC児から読み手へのやりとりも楽器を介したものが多く、C児は楽器を使いたいときや読み手に楽器を鳴らしてほしいことを動作で伝えていたが、そこから読み手がことばで応答することでやりとりが展開した。これらのことから、楽器という具体物があることによって絵本の場面に応じた楽器を手渡す行動や要求を伝えるための行動が生じ、絵本のみ条件以上に読み手へのやりとりが増えたのではないかと考える。

(2) 歌や曲をつけることによって強調されたことばや場面

D児を除いたA児、B児、C児に共通していたことは、「ことば」のカテゴリーの歌うという行動が生じたことである。A児は先に歌うと後から歌う行動が生じ、B児は同時に歌う行動が生じた。B児は文に旋律をつけたところだけでなく、読み手が作曲して鍵盤ハーモニカで演奏した旋律やカリンバで伴奏しながらラララで歌った鼻歌のところもB児の声は出ていないが、読み手と同じように口を動かして歌っているかのようなであった。C児は絵本のみ条件で先に歌う行動が生じ、絵本+音楽条件では後から歌う行動が生じた。C児の絵本のみ条件で先に歌う行動が生じたのは、絵本+音楽条件の影響を受けたことによるものと考えられる。

繰り返される文に旋律をつけて歌ったところ、A児、

B児、C児において、その一部を歌うという行動が生じた。旋律をつけることによって、対象児が「まとまりをもって聞き、知覚する」(中村, 2016, p.129) ことで生じた行動ではないかと考える。また、早川・片山(2020)は、歌う行為そのものが、ことばのみで伝えるよりも多様な音声表現を用いていることから、子どもに受け入れられやすいと述べている。これらのことから、繰り返される文を読み手が読むだけでなく、そこに旋律をつけて歌にすることや曲をつけることによって印象を強めたことで導き出された行動であると考えられる。

(3) 友だちを意識した行動を引き起こす

A児を除いたB児、C児、D児に共通していたことは、「動作・行為」のカテゴリーの友だちを見るという行動が非常に多く生じたことであり、B児は7回、C児は25回、D児は13回であった。B児がA児を見ていた場面は、A児が楽器を鳴らしているときや動いているときであったことから、絵本のみ条件のとき以上に動いているA児の動きがB児の注目を引いたのではないかと考える。

ペア2では、C児、D児の間で互いを意識した行動が見られた。楽器を鳴らしながらD児を見ていたC児や楽器を鳴らしているC児をD児が見ていた場面が多く、楽器があることによって生じた行動であると言える。また、C児からD児に楽器を手渡す姿が見られたことから、普段の療育とは異なる環境が二人の関わりに変化を与えたのではないかと示唆される。

4. 歌や楽器を取り入れた絵本の読み聞かせで考慮すること

本研究では、研究実施者である読み手が絵本の読み聞かせと歌唱や演奏を行ったが、複数名でそれぞれを独立させて行う方法も考えられる。また、対象児にとっては初めて見る楽器があったと推測されることから、事前に楽器を紹介する時間や楽器に触れる時間を設定し、楽器に馴染む機会をもつことも方法の一つであると考えられる。

各ペアの始まりの会を担当していた保育士の事後アンケートにあった絵本に歌や楽器を取り入れた読み聞かせを実践してみたいかという質問に対して、ペア1、ペア2の保育士ともに「やや思う」という回答であった。そこには実践してみたい気持ちはあるが、実践する保育士が楽しんで取り組めるか否かという不安や頻繁に取り組むことは難しいという背景があった。本研究は、研究実施者が保育士のほかに日本音楽療法学会認定音楽療法士の資格を取得しており、音楽的な知識や技術を持ち合わせていたため、絵本のことばに旋律をつけること、効果音の取り入れ方や効果音に使用するための楽器の選択に影響していたことは明らかである。しかし、音楽的な知識や技術が必ずしも必要ではなく、担当保育士の事後アンケートの回答結果に示されていたように、歌つきの絵本から実践してみることや保育で使用する身近な楽器を取り入れることも試みとして考えられる。また、幼児教育を専攻する学生や保育者養成校の学生が絵本に音や音楽をつけ、発表会を行う取り組みがある

(小島, 2007; 寄, 2018)。このような取り組みを行うことによって、絵本に音や音楽をつける方法を学ぶことができ、将来的に実践に結びつく可能性が示唆される。

対象児によっては、絵本の読み聞かせで物語の把握や理解をして、読み手とのやりとりが可能になる場合もあるが、歌や楽器を取り入れた絵本の読み聞かせを行うことで新たな行動を引き出し、やりとりが増える場合もある。いずれの場合も絵本自体が持つ固有性を大切にしながら対象児の発達年齢を考慮して絵本の選定を行い、選定した絵本に歌や楽器を取り入れるか否かを考えていく必要性があると言える。

5. 本研究の限界と今後の課題

本研究の限界として、対象児が4名と限られていたことや絵本のみ条件と絵本+音楽条件が各4回ずつであったことから、結果を一般化することは困難である。加えて、本研究では1作品の絵本の読み聞かせであったことからとも言えることである。また、ASDの症状や発達年齢が様々であること、絵本の読み聞かせの前の状況が毎回一定であると限らないことが、結果に影響を与えていると考える。さらに、楊・多治見(2021)が述べているように、絵本の読み聞かせは一回性という特質を持ち、再現は不可能であり、同じ子どもを対象に同じ絵本を読んでも同じ読み方にはならないことから、環境や対象児だけでなく、読み手の変化も一要因であるとわかる。とくに本研究においては、読み手の読み方だけでなく、歌い方や楽器の音の出し方の再現性も問われるところである。

今後の課題として、本研究は対象児2名を一つのペアとして絵本の読み聞かせを行ったが、小林(1997)は、絵本の読み聞かせにおける年齢、性差、座席の位置の違いによる幼児の反応を述べており、吉岡・古家・井上(2019)は、絵本の読み聞かせにおけるグループサイズの違いが幼児の反応に影響を与えていると述べている。絵本の読み聞かせの形態の影響が示されていることから、対象児の座席の位置や人数を考える必要がある。

また、本研究では研究実施者である読み手が文に旋律をつけて歌にしたものや作曲した曲を取り入れたが、既成曲を取り入れることも可能である。歌や曲、楽器の取り入れ方や構成を吟味し、ASD児の発達に寄与できるような絵本の読み聞かせを行っていくことが求められる。それと同時に、保育士が実践しやすい、実践してみたいと思えるような歌や楽器を取り入れた絵本の読み聞かせを増やしていくことが期待される。

引用文献

- 疇地希美・嶋田ひろみ・山本八千代・吉村雅美(2018) クラシック音楽を用いた絵本の上演－絵本の音楽会より『スイミー』－. 中部大学現代教育学部紀要, 10, 105-112.
- 疇地希美・嶋田ひろみ・山本八千代・吉村雅美(2021) クラシック音楽を用いた絵本の上演3『さつまのおいも』－モデルタイプと制作方法論の検討－. 同朋大学

- 紀要同朋福祉, 28, 233-257.
- 深田昭三・倉盛美穂子・小坂圭子・石井史子・横山順一 (1999) 幼児における会話の維持: コミュニケーション連鎖の分析. 発達心理学研究, 10 (3), 220-229.
- ふくながじゅんぺい (作) (2022) へんしん! いろいろれっしゃ. 交通新聞社.
- 古市久子 (2012) 絵本がもつリズム性がこどもに与える教育的意味. 愛知東邦大学紀要東邦学誌, 41 (1), 109-125.
- 早川倫子・片山美香 (2020) 養育者の子育てにおける「歌う行為」の可能性 - 3名の母親を中心に -. 岡山大学教師教育開発センター紀要, 10, 139-151.
- 平澤順子 (2019) 保育所1歳児クラスの絵本場面における保育者支援の役割 - 縦断的研究の分析を通して -. 保育学研究, 57 (2), 87-99.
- 生田美秋・石井光恵・藤本朝巳 (2013) ベーシック絵本. ミネルヴァ書房, 2-66.
- 金子幸・北野幸子 (2010) 幼児の自己肯定感を育む教育方法に関する研究 - メディアとしての絵本とその活用の検討 -. 国際幼児教育研究, 18, 5-14.
- 小林真 (1997) 集団場面における絵本の読み聞かせと幼児の反応 - 年齢・性差と座席の位置による影響について -. 児童文化研究所所報, 19, 1-13.
- 小島千か (2007) 絵本と音楽 - 子ども図書室での学生による発表を通して -. 山形大学教育人間科学部附属教育実践総合センター研究紀要, 12, 1-12.
- 小島千か (2010) 絵本を用いた音楽づくりにおけるイメージのはたらき. 山梨大学教育人間科学部紀要, 11, 115-125.
- 今由佳里・尾辻菜摘子 (2020) 五感をはたらかせた絵本の読み聞かせに関する一考察. 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 29, 19-28.
- 近藤みえ子・山本理恵 (2013) 集団での絵本の読み聞かせを通しての自閉症スペクトラム幼児の発達支援 - 共同注意・情動の共有に着目しての実践の分析より -. 保育学研究, 51 (3), 318-330.
- 両角正子 (2006) 障害児の子育て支援と療育における絵本の役割 コミュニケーションの力をひろげる. 障害者問題研究, 33 (4), 275-282.
- 中島啓子・工藤ゆかり (2021) 保育現場における絵本との関わりの実態を踏まえた保育者養成の在り方. 北翔大学北方圏学術情報センター年報, 13, 1-14.
- 中村千晶 (2016) 幼児の音楽聴取についての一考察. 関西学院大学紀要教育学論究, 8, 127-134.
- 並木真理子 (2012) 幼稚園における絵本の読み聞かせの構成および保育者の動作・発話が幼児の発話に及ぼす影響. 保育学研究, 50 (2), 165-179.
- 大元千種 (2023) 3歳未満児の絵本世界の取り込み過程についての分析 - 絵本の読み聞かせをとおしての保育者の気づきから -. 別府大学センターレポート, 42, 23-30.
- 篠沢薫 (2013) 自閉症スペクトラム障害児の会話の維持機能を促す支援. 東洋大学紀要ライフデザイン学研究, 9, 179-190.
- 竹内唯・奥忍 (2007) 絵本の中の音楽 - 画・言葉・テーマとの関連に着目して -. 岡山大学教育実践総合センター紀要, 7, 27-37.
- 富田喜代子・佐々木宏子・青悦美代 (1995) 絵本の読みかきかせにおける読み方の研究 (2) - 子どもの読みとり反応を中心に -. 日本保育学会大会研究論文集, 376-377.
- 山本理恵・近藤みえ子 (2008) 自閉症幼児に対する絵本を介した発達支援 - 障害児通園施設での実践分析より -. 保育の研究, 22, 54-66.
- 寄ゆかり (2018) 絵本からイメージできる音表現の追求. 大阪千代田短期大学紀要, 47, 124-131.
- 吉岡真梨子・古家遥・井上弥 (2019) 絵本の読み聞かせにおけるグループサイズは幼児の反応に影響を及ぼすか?. 広島大学大学院教育学研究科学習開発学研究, 12, 81-89.
- 楊奕・多治見里美 (2021) 熟練保育者の「語り」から考える絵本の読み聞かせの意味 - ことばとからだの関係に着目して -. 中部大学現代教育学部紀要, 13, 15-27.